

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02071

研究課題名(和文)「背教者」ユリアヌス像の形成とその受容

研究課題名(英文) Imagery of Julian 'the Apostate': its Formation, Transfiguration and Reception

研究代表者

高久 恭子(中西恭子)(TAKAKU-NAKANISHI, Kyoko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・研究員

研究者番号：90626590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、コンスタンティヌス一世以後のローマ帝国における親キリスト教政策を放棄して新プラトン主義を参照項に多神教系祭儀の振興を志した四世紀のローマ皇帝ユリアヌス(331/2-363年、在位361-363年)の著作にみられる宗教思想を体系的に解明し、彼が「過てる哲人王」「キリスト教の敵」と認識されるに至る経緯を同時代人の著作を分析して明らかにする。また、ユリアヌス像が初期近代に「古典の擁護者」へ、近代以降には「戴冠せるロマン主義者」へ変容を遂げる過程を観察し、その宗教史的意義を考察する。成果の一部は『ユリアヌスの信仰世界 万華鏡のなかの哲人皇帝』(慶應義塾大学出版会、2016年)に結実した。

研究成果の概要(英文)：Roman Emperor Julian(331/2-363, sole reign 361-363) is known for his conversion from Christianity and Constantinian pro-Christian imperial politics to the promotion of sacrifice and asceticism as the essential of his religions of 'forefathers'. This research project examines how Julian adopted Iamblichan Platonic religious philosophy to reconstruct his ideas and ideals, and how he became recognized as 'the Apostate' and 'the Failed Philosopher-Emperor' among the sphere of his contemporary litterati.

The other research question of this research project is how it could be possible to describe the reception history of the imagery of Julian: medieval Julian 'the Apostate', Renaissance-early modern Julian 'the Defender of Classics', modern 'Romanticist on the Throne' and after.

The monograph "Philosopher-Emperor in Kaleidoscope: Faith and Religion of Julian" (Keio University Press, 2016) by Kyoko Nakanishi, the representative of this project, is a part of the research product.

研究分野：思想史

キーワード：ユリアヌス インテレクチュアル・ヒストリー 古代末期地中海世界宗教史 教義論争期の宗教政治史
新プラトン主義 初期キリスト教 ヘレニズム・ローマ宗教史表象の受容史 儀礼論と神話論

1. 研究開始当初の背景

4世紀のローマ皇帝ユリアヌス(フラウィウス・クラウディウス・ユリアヌス、331/2-363年(在位361-363年))は、コンスタンティヌス一世以来のローマ帝室の親キリスト教的政策に抵抗してヘレニズム・ローマ宗教復興策を展開した「最後の異教徒皇帝」として知られる人物である。

ユリアヌスはアレクサンドロス大王とマルクス・アウレリウスを模範的君主として仰ぎ、ヘレニズム・ローマ宗教の供犠の実践と修徳修行を称揚した。しかし、彼の宗教政策は在位中から同時代人の困惑を招いた。ペルシアとの境域係争で彼が戦死すると、帝国の宗教政策は親キリスト教路線に復帰した。

ユリアヌスにとっての同時代の宗教の意義とは何か。彼はいかにして後世「キリスト教の敵」とみなされるようになったのか。本研究はこの問いに発する。

先行研究では、ユリアヌスの宗教観のなかに、キリスト教への反発に基づくヘレニズム・ローマ宗教復興の意図とともにイアンブリコス派新プラトン主義の影響があることが指摘されてきた。ユリアヌスのイアンブリコス派新プラトン主義との関わりは秘教的な性質をもつものとして理解されるべきか。4世紀のローマ帝国における在来の多神教系祭儀とキリスト教の関わりをいかに描くべきか。これらの問いもまた重要な争点であった。(Joseph Bidez, *La vie de l'Empereur Julien*, Paris, Les Belles Lettres, 1930; Glen Wren Bowersock, *Julian the Apostate*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1978; Polymnia Athanassiadi, *Julian: An Intellectual Biography*, London, Routledge, 1992; Rowland Smith, *Julian's Gods*, London, Routledge, 1995; Klaus Rosen, *Julian: Kaiser, Gott und Christenhasser*, Stuttgart, Klett-Cotta, 2006; Christian Schäfer ed., *Kaiser Julian 'Apostata' und die philosophische reaktion gegen das Christentum*, Berlin, De Gruyter, 2008, etc.)

秘教的思想として理解されてきた古代末期の新プラトン主義にも、在来の多神教の顕教的側面に対する再解釈の系譜があることが1990年代後半以降注目されるようになった。本研究の関心もこの潮流の上に立つ。

ユリアヌスの宗教観には、帝室成員として実際に政治にかかわるうちに培われた公共性と顕教性への意志が明確にみられる。彼は女人禁制の太陽神崇敬秘儀結社・ミトラス教を帝国領内に広く存在する星辰祭祀の一類型として理解していた。イアンブリコス『エジプト人の秘儀について』の祭儀論は、公私にわたる在来の各種儀礼の意義を、明澄な理性をもって神的存在の認識に至るための営為として定義する。ここには近代エソテリズムを通して想起される隠秘性につらなる要素は必ずしも看取されない。

もし、ユリアヌスの宗教観と宗教政策が単にヘレニズム期から帝政盛期のギリシア・ローマ宗教の復興を主眼とするものであれば、これほどに同時代人の反発と当惑を招くものとはならなかったのではないか。

このような観点から、博士学位請求論文「ユリアヌスの宗教復興における『真の愛智』その構想と帰結」では、ユリアヌスの著作群の分析を通して彼の宗教観の構造を明らかにし、2011年4月に東京大学大学院人文社会系研究科において博士号を取得した。古代末期地中海世界宗教史研究に貢献を行うため、博士論文の内容を発展させて単著として上梓することが大きな課題であった。

2. 研究の目的

本研究課題申請の段階では、科学研究費助成事業研究成果公開促進費(学術図書)に採択されることを条件に、慶應義塾大学出版会から『ユリアヌスの信仰世界』を上梓する企画が決定していた。

本研究の第一の目標は、『ユリアヌスの信仰世界』上梓にあたって叙述をより明快にし、以下の課題に着眼して史料を分析し、内容の充実を図ることにある。

(1)ユリアヌスの信仰世界の背景にあるアレオス論争期のキリスト論論争が求めた「宗教性」のかたちとともに、教義論争に対する帝室の介入の諸相を明らかにする。

(2)ユリアヌスの宗教観の構造を彼の著作に即して体系的に把握しつつ、彼のキリスト教批判の特徴を明らかにし、在来の多神教系祭儀の正当化の論理をイアンブリコス『エジプト人の秘儀について』の思想と比較する。

(3)その上で、ユリアヌスがキリスト教のオルタナティブとみなした「哲学」がどのようなものであったかを明らかにする。

(4)さらに、ユリアヌスの事績とその帰結が後世にいかん記憶され、文藝化されていったのか。その系譜を明らかにする。

(5)可能であれば、ユリアヌスの著作および周辺諸史料の翻訳を行う。

3. 研究の方法

研究の方法は一貫して、テキスト分析と周辺史料との比較検討を通して、ユリアヌスの宗教観とその受容過程にみられる宗教表象をインテレクチュアル・ヒストリー(広義の精神文化史)に位置づける作業による。

(1)以下のユリアヌスの著作群を検討し、宗教思想・宗教観の抽出・再構成を行う。

書簡

単独統治期以前の作品(2編の『コンスタンティウス頌詞』、『エウセビア頌詞』、『サルスティウスを送る』)

単独統治期の作品(『テミスティオス宛書簡』、『犬儒者ヘラクレイオス駁論』、『無学なる犬儒者を駁す』、『神々の母への讃歌』、『王なるヘーリオスへの讃歌』、『皇帝たち』、『ひげざらい』、『ガリラヤ人駁論』)

(2)ユリアヌスが着想源とした可能性のある先行作例の痕跡は、彼の著作に見られるか。先行研究におけるユリアヌスの著作への先行作例の影響への言及、特にユリアヌスが読んだ可能性のある先行作例の一覧を提示した Jean Bouffartigue, *L'Empereur Julien et la culture de son temps*. Paris, Institut d'Études Augustiniennes, 1992 の各項目を参照しつつその当否を検討する。

(3) ユリアヌスがもたらした事態に関する同時代人の評価の系譜を検討する。紀元後 4 世紀から 5 世紀のキリスト教史料(ナジアンゾスのグレゴリオス『ユリアヌス駁論』からアウグスティヌス『神の国』に至る諸論考、および年代記作家・教会史家群によるユリアヌスの治世の叙述)に加え、リバニオス「ユリアヌス弁論群」、アンミアヌス・マルケリーヌス、エウナピオス「ソフィスト伝」など非キリスト教側の歴史叙述を検討の対象とする。

(4)受容史に関する先行研究(Réne Braun et Jean Richer ed., *L'Empereur Julien: de l'histoire à la légende, 331-1715*. Paris, Les Belles Lettres, 1978; Jean Richer ed., *L'Empereur Julien: de la légende au mythe (de Voltaire à nos jours)*, Paris, Les Belles Lettres, 1981; Klaus Rosen, *Julian: Kaiser, Gott und Christenhasser*, Stuttgart, Klett-Cotta, 2006: 394-462)で言及された事例を中心に、古代末期、中世(西方および東方)文藝復興・宗教改革期、初期近代、近代、現代に至る時系列を追って、各時代のユリアヌス像の特徴を検討する。

(5)近現代日本におけるユリアヌス受容は文学的史伝による紹介を通して行われることが多かった。ここでは、イプセンによるレーゼドラマ『皇帝とガリラヤ人』の明治・大正期のイプセン・ブームにおける翻訳・翻案の状況に加えて、第二次世界大戦に至る旧制高校文化のなかで人気を博した帝政末期ロシアの作家メレジコフスキイの小説『神々の死』の翻訳・翻案と、代表的読者としての折口信夫と大川周明の『神々の死』体験を検討する。戦後の事例としては辻邦生『背教者ユリアヌス』の受容を検討する。

4. 研究成果

2016年4月に科学研究費助成事業研究成果公開促進費(学術図書)に採択され、『ユリアヌスの信仰世界』を上梓することが可能となった(課題番号 16HP5022)。本研究課題の当初の目的とその成果はおおむね『ユリアヌスの信仰世界』に託すことができた。

(1)アレイオス論争期からカルケドン公会議における教義論争史に関する研究

基礎的な作業として、アレイオス論争からカルケドン公会議に至るローマ帝国の宗教政策と帝室の教義論争への参与の状況を整理し、論文「ニカイアからカルケドンへ 古代末期の東方におけるキリスト論論争と教

会政治史」において、アレイオス論争期からカルケドン公会議に至る教会政治史の状況の概観を行った。

さらに、コンスタンティヌス一世治下からテオドシウス二世治下に至るローマ帝国の宗教政策におけるキリスト教正統主義教会以外の諸宗教(キリスト教系諸分派、在来の多神教型宗教、ユダヤ教)への処遇の比較研究も行った。テオドシウス一世治下のみならず、410年のローマ劫掠事件以降に、キリスト教正統主義教会保護策にもとづく他教派・他宗教に対する排他的対応の厳格化の画期があることを明らかにした。

この成果に関しては、日本宗教学会大会のほか、科学研究費研究助成金基盤研究(A)「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」(代表者=市川裕、2014-2016年度、課題番号 25257008)および同基盤研究(A)「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料に基づく一神教の宗教史再構築」(代表者=市川裕、2017-2019年度(予定)、課題番号 17H01640)のプロジェクト関連のシンポジウムでも報告を行った。研究成果の文章化が今後の課題である。

(2)ユリアヌスの宗教観の体系的分析とその構造の描出

ユリアヌスの著作におけるキリスト教批判は、4世紀中葉の教義論争と帝国の宗教政策への真摯な応答である。

ユリアヌスは『ガリラヤ人駁論』において、紀元後4世紀中葉当時、教義論争の争点であったキリスト論・神論・「神の母」マリア論が世俗の学問の援用によって構築されてきたことを、またその議論のなかで展開される一神教擁護の論理が一貫性に欠けることを鋭く指摘した。そして、聖職者や特に特権階級の信徒のなかにも高邁な徳と修徳修行を称揚しながらも緩やかな生活規範を重んじて政争と教義論争に明け暮れる人物が存在することを指摘した。『ガリラヤ人駁論』『神々の母への讃歌』『王なるヘーリオスへの讃歌』では、ローマ帝国領内の諸宗教が共有する星辰信仰と太陽神崇敬が哲学的諸思潮の至高神概念に通じることを指摘し、キリスト教のオルタナティブとしてイアンブリコス派新プラトン主義の祭儀論を用いて在来の多神教系祭儀の核心にある供犠の正統性を主張した。

彼は「犬儒者」表象を通して在来の「哲学者」の行動と思想の不一致を激しく糾弾した。ユリアヌスにとっての「哲学」とは、「小宇宙」としての人間が徳の涵養を行うために模倣すべき模範として提示される神々と大宇宙の秩序に関する論理と行動規範を提示する思想と実践の体系であり、キリスト教も「哲学」の一環として理解される。また、「市民の一員でありしもべ」としての君主像はディオソストモスらストア主義者の帝権論からの借用の可能性もある。

(3) ユリアヌス像の受容史の描出

『ユリアヌスの信仰世界』では、第一章「万華鏡のなかの哲人皇帝」でユリアヌス像の受容史を提示し、「背教者」と「過る哲人皇帝」像にひき裂かれる古代末期のキリスト教史料のユリアヌス像を「おわりに 万華鏡のなかの哲人皇帝、ふたたび」で紹介した。

古代末期におけるユリアヌス批判は、中庸な施策をとりえた明敏な人物がなぜ独自の宗教政策と過剰な修徳修行に傾倒したのか、という問いへ向かう。ヒエロニムス『年代記』、ヨアンネス・クリュソストモス『聖パピュラスを擁護し異教徒を駁す』など、「キリスト教の敵」としての姿に着眼する史料が370年代以降に出現するが、これらの読解と分析にあたってはキリスト教徒がユリアヌスから受けた衝撃を語るさいの意識の複層性を考慮する必要がある。中世では西方・東方ともにユリアヌスは「キリスト教の敵」として描かれる傾向がある。好例は『黄金伝説』である。しかし、10世紀の『スーダ事典』における「修行者」ユリアヌス像や、教権の腐敗に対する批判の有力な論拠としてのビザンツ期のユリアヌス読解など、可能な限り彼の営為を肯定的に把握する試みもみられる。

ユリアヌスの営為の本格的な再評価は文藝復興期のフィレンツェの君主、ロレンツォ・デ・メディチにはじまる。ユリアヌス治下の殉教者伝説にもとづく演劇の上演のさい、彼はアンミアヌス・マルケリーヌスを参照し、一方的にユリアヌスを悪者として描く試みを避けようとした。当時の著作家たちにとって、「キリスト教の敵」「キリスト教に的確な批判を加えて古典を擁護した明敏な学者肌の君主」の両面を有機的に結んでユリアヌスの素顔に迫ることは決して容易な作業ではなかった。エラスムスもユリアヌスを論ずるさいにこの両面にひき裂かれた。

17世紀から18世紀にかけては「古典の擁護者」としてのユリアヌス像がさらに注目され、皇帝であるユリアヌス自身が自虐的なユーモアに託して権力を批判する『ひげざらい』と『皇帝たち』に読書人は関心を寄せた。19世紀には美と理想に殉じるユリアヌス像が描出され、戦間期の全体主義者の関心をも惹きつけた。20世紀以降も「理想に殉じる古典の擁護者」としての像は継承されるが、新プラトン主義像の検証や、全体主義への影響の解明など、ユリアヌス受容の宗教史的な意義をめぐって検討すべき課題は多い。

近代日本ではエドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡史』を通して「古典の擁護者」としてのユリアヌス像が輸入され、19世紀型のユリアヌス像がイブセン『皇帝とガリラヤ人』やメレジコフスキ『神々の死』を通して親しまれた。日本におけるユリアヌス像の受容を考察するあたり、西洋古代表象受容の精神史・文化史的意義のみならず、歴史的知識の伝達における文学と歴史研究の相克に踏み込んで論じる必要が生じた。

文藝創作によるユリアヌス像の描出はかつて日本語圏の歴史研究者にとっては真剣な検討の対象だった。大類伸はイブセンが『皇帝とガリラヤ人』に籠めた歴史理論を検討し、高橋秀と秀村欣二は『背教者ユリアヌス』に辻邦生が託した古代憧憬を同時代人のメッセージとして受け止めつつ、創作と研究の職掌範囲の相違を論じた。

この延長上に、国文学・民俗学研究と並ぶ立つ「古代人の心にゆきふれる」創作活動への示唆を『神々の死』から得た折口信夫の体験を位置づけることができよう。『神々の死』の生活誌描写のリアリズムは、折口を『死者の書』の作劇法に導いた。折口は『死者の書』執筆にあたり、8世紀の平城京に住む貴族の生活誌を詳述するとともにモダニズム的な「意識の流れ」の手法を用いて主人公・藤原南家郎女の視点から神仏混淆的な異界と他界との接触のリアリティを描き出した。

本研究課題では、第二次世界大戦後の折口信夫の「神道宗教化論」における『神々の死』受容の影響についても調査を行った。折口信夫の「神道宗教化論」における在来宗教の回顧の論理は、神道を民俗的習慣として受け流すのではなく、国家神道体制における神道観の超克を目指して日本の宗教伝統を古代に遡って再検討し、神道を体系的な思考と習慣ある清新な宗教として再生させようとする伝統の再解釈の試みであった。また、戦前戦後の折口の歌論には、行為と言語表現の一致を求める思考もみられる。ここにはメレジコフスキも『神々の死』で描いた「思いと行いの一致」と「在来の宗教の価値の再評価」を求めるユリアヌスの思考の型と通ずるものが看取されるが、実証的な学術論文の形式で証明可能な確固たるユリアヌス受容の痕跡を確認することは容易ではなかった。

大川周明の『神々の死』体験と彼の思想への影響に関しては20世紀前半の日本におけるイスラーム受容の知識とあわせて検討する必要が新たに生じた。将来的には彼らの思想そのものを主題として考察したい。

辻邦生『背教者ユリアヌス』の受容過程は、大岡昇平をイデオログに1960年代から1970年代にかけて行われた「歴史小説論争」の一場面に位置づけることが可能である。

大岡はジェルジ・ルカーチ『歴史小説論』を論拠に、歴史に対する通念を再話する歴史読み物や、実証的手法に裏付けられていても「物語の文体をもたない」歴史家による啓蒙書よりも、近代的リアリズムによる緻密な考証と描写を用いて、英雄を登場させずとも民衆の精神を鼓舞し啓蒙するマスキュランな物語作法をもつ歴史小説こそが歴史叙述の覇者であるべきだと主張した。

大岡は司馬遼太郎作品・井上靖作品について、『背教者ユリアヌス』を批判の標的とした。辻が英雄的主人公を採用し、登場人物の心理描写に関心を向けたことが、大岡の理想とする歴史小説家像にふさわしくなかった

のであろう。菅野昭正編『作家の世界 辻邦生』(番町書房、1978年)や、『辻邦生全集』第20巻「辻邦生文学アルバム」(新潮社、2006年)に再録された菅野昭正・粟津則雄・高橋英郎ら辻の盟友が寄せた「日本人作家の著した本格的古典古代小説」としての『背教者ユリアヌス』評は、大岡の唱えた歴史小説像への対抗の試みであったことを窺わせる。

(4) 予想外の事態

本研究費での研究従事期間中に東地中海圏の紛争地域の政情悪化により、トルコ共和国ハタイ地方およびシリア・イラク国境地帯が退避・渡航延期勧告地域に指定された。このため、ハタイ国立考古学博物館とアンティオキア・ダフネ旧跡およびその周辺諸都市のイアンプリコス派新プラトン主義史跡視察計画を実行することが不可能となった。

最終年度には、京都大学学術出版会・西洋古典叢書の一環として刊行される予定の『ユリアヌス著作集』の翻訳注解作業と、ユリアヌスの評伝(『コンスタンティヌス朝の宗教とユリアヌス』(仮題、慶應義塾大学出版会から刊行予定))の執筆に向けて準備作業に入ることができた。

この時点で新たなユリアヌス著作選集の校訂本に加え、ユリアヌス表象受容史研究の重要な史料であるアレクサンドリアのキュリロス『ユリアヌス駁論』とキュロスのテオドーレートス『ギリシア病の治療について』の新校訂・注解本も刊行されたことが判明し、これまで行ってきた作業を全面的に見直す必要が生じた(Heinz-Günther Nesselrath (Hrsg.), *Iulianvs Avgvstvs opera*, Bibliotheca scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, Berlin, De Gruyter, 2015; Christoph Riedweg (Hrsg.), *Kyriell von Alexandrien, Gegen Julian, Buch 1-5. Die griechischen christlichen Schriftsteller der ersten Jahrhunderte N.F. 20*, Berlin, De Gruyter, 2015; Wolfram Kinzig und Thomas Brüggemann (Hrsg.), *Kyriell von Alexandrien, Gegen Julian, Buch 6-10 und Fragmente*, Die griechischen christlichen Schriftsteller der ersten Jahrhunderte N. F. 21, Berlin, De Gruyter, 2017; Theodoret, *De Graecarum affectionum curatione: Heilung der griechischen Krankheiten*. Übersetzt, eingeleitet und mit Anmerkungen versehen von Clemens Scholten. Supplement to *Vigiliae Christianae* 126, Leiden, Brill, 2015).

世界的にみて、古代末期地中海世界宗教史研究の問題関心は現在、多宗教間の共存と相克の諸相に移った。この時代に関する知見がキリスト教寄りの視点から共有されることの多い日本語環境では、古代末期地中海世界における「キリスト教とその他の宗教の相克」の宗教史的な位置づけを明確にして概観を描き、読者に届ける作業が急務である。

アレクサンドリアのキュリロス『ユリアヌ

ス駁論』とキュロスのテオドーレートス『ギリシア病の治療について』に関する研究成果の発表は、古代末期地中海世界の新プラトン主義における神話表象の回顧の系譜化ともあわせて、今後行う予定の古代末期における宗教・神話表象の受容史研究に託したい。

最終年度にはロンドン大学先端研究所内ウォーバーク研究所図書館で調査を行い、文藝復興期・初期近代における古代宗教・初期キリスト教表象受容史研究の現況を知ることができた。古典の受容と継承の宗教史的意義を問う観点は、ポストローマ期・ビザンツ期以後における古代宗教表象・初期キリスト教表象の受容史研究にもつながる。教父およびその周辺の著作と初期キリスト教表象の文藝復興期・初期近代における受容状況の研究は未開拓の部分も多く、広大な可能性が秘められている。中世以降のユリアヌス受容史に関して、中世以後の古代宗教表象および初期キリスト教表象受容史研究に位置づけて論じるほうが生産的であると判断した。

(5) アウトリーチ活動

慶應義塾大学出版会からの依頼により、『ユリアヌスの信仰世界』上梓直後に著者解説を執筆し、慶應義塾大学出版会のウェブサイト上で公開した。

『ユリアヌスの信仰世界』は哲学研究者・歴史学研究者・宗教学研究者のほかに広く文学・現代詩歌関係の読者も得た。その結果、インテレクチュアル・ヒストリーの手法にもとづく宗教表象受容史研究の視座を生かした文藝評論を『ユリイカ』『現代詩手帖』など詩歌・表象文化論を扱う商業誌から依頼されることが増えた。古典や近代以前の宗教表象を着想源にもち、そのイメージのアダプテーションを行う作品を論じるとき、基礎的素養として宗教史・宗教表象史研究の方法に通じることで、作品世界とその背景に対する深い洞察が得られるという知見を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

中西恭子、「書評会：ハンス・ゲオルグ・ベック、戸田聡訳『ビザンツ世界論』(知泉書館、2014年)」、『エイコーン』46号、書評論文・査読有、2016、19-31

中西恭子、「ニカイアからカルケドンへ古代末期の東方におけるキリスト論論争と教会政治史」、『東洋学術研究』54巻2号、査読有、2015、111-146

http://www.totetu.org/assets/media/paper/t175_111.pdf

〔学会発表〕(計12件)

中西恭子、「帝政後期ローマの「一神教的異教徒たち」-「ローマ帝国のキリスト教化」を生きるユダヤ教徒-」、科学研究費研究助成金基盤研究A(海外学術調査)「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴーク資料に

基づく一神教の宗教史再構築」シンポジウム「イスラエル新出土シナゴークから一神教の宗教史を見直す」シンポジスト、東京大学本郷キャンパス、2018

中西恭子、「歴史と文藝のはざままで 近現代日本における「背教者」ユリアヌス像の受容」東洋大学人間科学総合研究所シンポジウム「歴史理論・史学史の現在的問題」シンポジスト、東洋大学白山キャンパス、2017

中西恭子、「古代末期地中海世界の宗教文化史におけるジェンダーと奢侈をめぐる」日本宗教学会第76回大会第3部会、東京大学本郷キャンパス、2017

中西恭子、「江添誠報告 ”Religious Identities of Decapolis as Reflected by the City-Coins: With a focus on the Images of Tyche” への特定質問」、科学研究費基盤研究(A)「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明的的研究」(代表者=市川裕)シンポジウム「イエス時代のユダヤ共同体における宗教的要素と物質的要素」特定質問者、東京大学駒場キャンパス、2017

中西恭子、「長い古代末期」の宗教史を書く諸宗教の変容とローマ帝国の遺産」日本宗教学会第75回大会パネル「唯一神教の世界宗教史再考」(代表=市川裕、特定質問者=葛西康德)、パネリスト、早稲田大学戸山キャンパス、2016

中西恭子、「シンポジウム「宗教」をものがたる」全体コメント、「イメージ・宗教・想像力」研究会、企画者側コメンテーター、日本女子大学、2016

中西恭子、「古代末期におけるエトノス概念とユダヤ人」、科学研究費研究助成金基盤研究A「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明的的研究」Aグループ報告会、東京大学駒場キャンパス、2016

中西恭子、「橋を架ける 宗教学、「災厄と再生の時代」そして近現代日本語詩歌」、物語研究会小シンポジウム「災厄と物語」、シンポジスト・木村朗子との共同企画、日本大学文理学部、2016

中西恭子、「古代末期における「供犠を行う皇帝ユリアヌス」の主題のキリスト教的変奏・再考」、古代史研究会大会、京都大学、2015

中西恭子、「古代末期の宗教史叙述における「背教者」と「災厄」のイメージ」、日本宗教学会第74回大会、創価大学、2015

中西恭子、「ユリアヌスの信仰世界 その構造と宗教史的意義」、日本西洋中世学会第7回大会ポスター報告、東洋大学、2015

中西恭子、「聖地としてのエルサレムとユリアヌスの信仰世界におけるユダヤ教」、日本聖書学研究所例会、日本聖書神学校、2015

〔図書〕(計1件)

中西恭子、慶應義塾大学出版会、『ユリアヌスの信仰世界 万華鏡のなかの哲人皇帝』、2016年、376頁

〔その他〕

(1)日本宗教学会大会報告抄録

(『宗教研究』学術大会紀要特集号掲載)

中西恭子、「帝政後期ローマ宗教史におけるジェンダーと奢侈をめぐる考察」、『宗教研究』第91号別冊・第76回学術大会紀要号、2018、219-220

http://jpars.org/journal/bulletin/vol_9_1

中西恭子、「『長い古代末期』の宗教史を書く」、日本宗教学会パネル報告「唯一神教の世界宗教史再考」、『宗教研究』第90号別冊・第75回学術大会紀要号、2017、55-56

http://jpars.org/journal/bulletin/vol_9_0-3

中西恭子、「古代末期の宗教史叙述における『背教者』と災厄のイメージ」、日本宗教学会第5部会報告、『宗教研究』89巻別冊・第74回学術大会紀要特集号、2016、256-257 DOI:10.20716/rsjars.89.Suppl_256

http://jpars.org/journal/bulletin/vol_8_9-3

(2)方法論的アウトリーチとしての文藝評論

中西恭子、「古典の擁護者 きらめく海に遊ぶ 高橋睦郎『詩人が読む古代ギリシア』、『現代詩手帖』2017年10月号、依頼原稿、2017、125

中西恭子、「ことばは広場となり 大岡信の古典受容をめぐる」、『ユリイカ』2017年6月増刊号「追悼・大岡信」、依頼原稿、2017、206-213

中西恭子、「夢みるひとの物語、醒めたるものの物語 ファンタジーと「宗教的なもの」についての試論」、『ユリイカ』2016年12月号「特集『ファンタスティック・ピースト』と『ハリー・ポッター』の世界」、依頼原稿、2016、189-195

中西恭子、「叙景と引証とわたし、ある古代末期文学紹介の試み」、『現代詩手帖』2016年9月号「特集・古典詩への誘い」、依頼原稿、2016、56-59

(3)ウェブサイト

中西恭子、「『ユリアヌスの信仰世界 万華鏡のなかの哲人皇帝』によせて」、慶應義塾大学出版会ウェブサイト、2016

<http://www.keio-up.co.jp/kup/gift/julianus.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

高久(中西)恭子

(Kyoko TAKAKU-NAKANISHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員

研究者番号:90626590